

絵本の読み聞かせが聴覚障害幼児の遊びの中でのコミュニケーションに及ぼす影響

岸田 健太郎

I 問題

聴覚障害を有する子どもが早期からの教育を受ける場として聴覚特別支援学校幼稚部（以下、聾学校幼稚部）があげられる。特別支援学校幼稚部教育要領（2009）の聾学校幼稚部での指導の項目では、言語の受容と表出、言語の形成と活用に関する事項が示されている。我妻（1999）は、早期教育段階での言語指導は、教師が子どもにことばを教え込むという形態ではなく、子どもにとって面白く、興味をそそられるような活動を教師が巧みに仕組み、そのような活動を通して子どもの情緒や認知能力に直接働きかけながらの言語指導が望ましいと述べている。また、特別支援学校幼稚部教育要領（2009）には、遊びは心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮し、遊びを通しての指導を中心として、ねらいが総合的に達成されるように示されている。これから、聴覚障害幼児の「言語」の獲得を踏まえた、遊びを通しての指導が必要であるという事が言える。

聴覚障害幼児の遊びは、直接自分が経験したことを単純に真似て再現するという水準に長くとどまる傾向があり、その遊びは変化に乏しく、かつ単純であると大塚（2002）は述べている。聴覚障害幼児の遊びの欠落している部分を補い解決するには、聴覚障害幼児自身が、友達や教師と遊ぶ経験を重ねることが大切であり、経験を共有していくうちに相手を意識したり、興味・関心を抱き、心を寄せていき、そこからコミュニケーションが活発になると柘田（2003）は述べている。

杉山（2015）や福岡県立福岡聾学校（1999）は、幼児の遊びの中でのコミュニケーションを増やすには、絵本やペーパーサートなどの教材を用いた幼

児間のイメージの共有化が重要であるということ述べている。佐藤・西山（2007）は絵本の読み聞かせから、子どもたちが友だちと一緒にその絵本の世界を体験し、その世界を様々な遊びの中につなげていくことの重要性を述べている。絵本の読み聞かせは、幼児間での共通の体験を促し、遊びの中でのコミュニケーション場を増やし、幼児の遊びの質を向上させる役割になり得ると考えられる。しかし、絵本の読み聞かせがどのように聴覚障害幼児の遊びの中でのコミュニケーションに影響をもたらしているのか、という点を研究目的とした研究論文はほとんど見られない。

II 目的

絵本の読み聞かせで使用する絵本の内容と幼児の遊び場面でのコミュニケーションの回数や内容を調べ、絵本の読み聞かせが聴覚障害幼児同士の遊び場面でのコミュニケーションに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

III 方法

1 対象

対象児は、Y 聾学校幼稚部の年長組に在籍する聴覚障害幼児 A 男児 5 歳 4 ヶ月（両耳に補聴器装用、装用閾値は両耳とも 25dB）、B 女児 5 歳 4 ヶ月（右耳は人工内耳、左耳は補聴器、装用閾値は右耳 22dB、左耳 78dB）の 2 名である。主なコミュニケーションモードは 2 名とも音声であったが、B 女児においては大人に対し簡単な手話を使う姿が実態把握期において見られた。また、両幼児ともに聴覚障害以外の障害を有してはいなかった。

2 研究期間と場所

201X 年 6 月上旬～下旬に、X 県 Y 聾学校幼稚部

の教室において3回分の遊び場をビデオカメラ2台で録画した。ビデオの収録時間は3回とも、片付けの時間も含め11時25分～12時5分の間で行い、活動時間の内訳は「絵本の読み聞かせ」で約10分、「遊び」で約25分であった。また、条件1、2、3はそれぞれ別々の日程で行った。

3 手続きの概要

絵本の読み聞かせを行わない遊び場面(条件1)
絵本の読み聞かせを行った後の遊び場面(条件2)
絵本の読み聞かせを行い、遊び場面においても絵本の絵が見られる環境下での遊び場面(条件3)を各1回ずつビデオカメラ2台で録画した。絵本の読み聞かせで使用した絵本は「せんろはつづく」シリーズ3冊(竹下文子・鈴木まもる, 金の星社)の全93頁の中から、幼児が遊具で表現しやすいと考えられる一部を抜粋(計26頁)し使用した。遊具は研究者が用意した木製のレール、汽車、積み木のみを設置した。研究者は対象幼児らの遊びに積極的にかかわらないようにした。例外として研究者は幼児に対し「応答」「代弁」「呼びかけ」「受け渡し」「賞賛」を例外のかかわりとして行なった。

以下は条件別での手続きである。

① 条件1(絵本無し)

Y 聾学校幼稚部の一室をパーテーションで区切り、「遊び」の場とした。積み木39ピース、木製の汽車4両、レールセット45ピースを籠の中に入れ、教室の中心付近に置き遊びを行った。

② 条件2(絵本有り・掲示無し)

Y 聾学校幼稚部の一室をパーテーションで区切り、「絵本の読み聞かせ」と「遊び」の場とした。「絵本の読み聞かせ」では研究者が対象幼児2名の前に座り、対面で読み聞かせを行った。「遊び」においては条件1と同様の遊具を用いた。

③ 条件3(絵本有り・掲示有り)

Y 聾学校幼稚部の一室をパーテーションで区切り、「絵本の読み聞かせ」と「遊び」の場とした。「絵本の読み聞かせ」では条件2と同様、研究者が対象幼児2名の前に座り、対面で読み聞かせを

行った。「遊び」においては条件1、条件2と同様の遊具を用いた。遊び場面においても絵本の絵が見られるようにするために絵本の絵10ページ分を掲示するホワイトボード(1m幅)2面を対象幼児の遊びを阻害しない場所に設置し、対象幼児が遊びの際にも絵本の絵を見られるようにした。

4 分析方法

3条件の映像記録のすべての遊び場を三浦・渡辺・渡辺(1986)に準拠し文字化し、文字化した記録を基に、3条件の遊び場面の対象幼児、研究者のコミュニケーションの回数や内容を分析した。

コミュニケーションの回数については館山・鄭(2011)のコミュニケーションの機能別カテゴリーを用い言語(発話)非言語(動作)に分け、より詳しく言語、非言語を機能別に分類した。幼児の遊びの段階はParten(1943)の分類表を用いて調べた。また、幼児同士のコミュニケーションの成立状況については、塚原(2006)が用いた分類を参考に、以下の水準を設け分類を行った(表1)。

表1 コミュニケーション成立水準

分類	内容
a水準	1往復半以上のやりとりがされている。
b水準	一往復止まりのやりとり。
c水準	やりとりが成立していない。
d水準	研究者の介入によりやりとりができる。

本研究においては条件1、2、3における遊びの時間がそれぞれ異なっていたため、対象幼児のコミュニケーション機能の表出やコミュニケーションの成立水準の回数を1分単位の表出回数に換算し、3条件の値を比較した。

5 倫理的配慮

本研究を進めるにあたり、対象幼児の保護者、先生方から研究協力の承諾と学内の研究倫理審査委員会の承諾(承認番号:2016-16)を得た。

IV 結果

1 A男児対B女児のコミュニケーション

両幼児の応答を要求する発話に分類される「応答要求有り」は3条件中、条件3が最も高い表出の回数を示した。また応答を要求しない発話に分類される「応答要求無し」は、条件1から条件2にかけて増加の傾向を示したが条件2から条件3にかけては減少の傾向を示した(図1)。

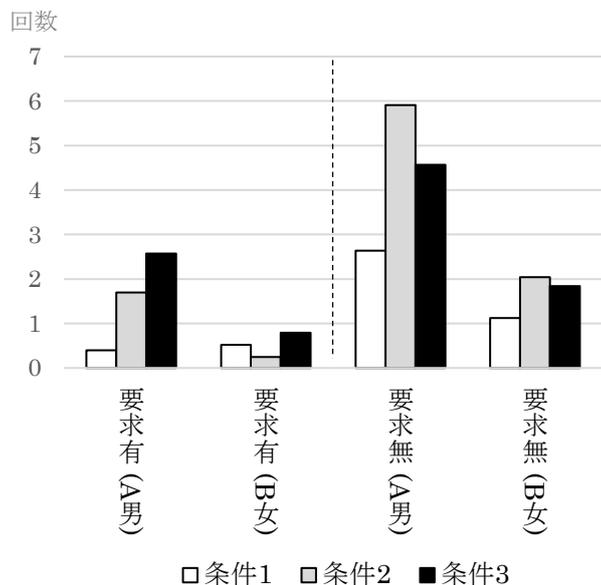


図1 応答要求有り・無しの条件別発話回数

コミュニケーションの成立状況は条件1から条件3にかけてb水準(0.12から0.63)c水準(0.36から1.00)の回数が増加傾向を示した。一方、a水準の回数は、条件1から条件2にかけて(0.04から0.33)増加傾向が見られたが条件2から条件3にかけてはほとんど変化が見られなかった(図2)。

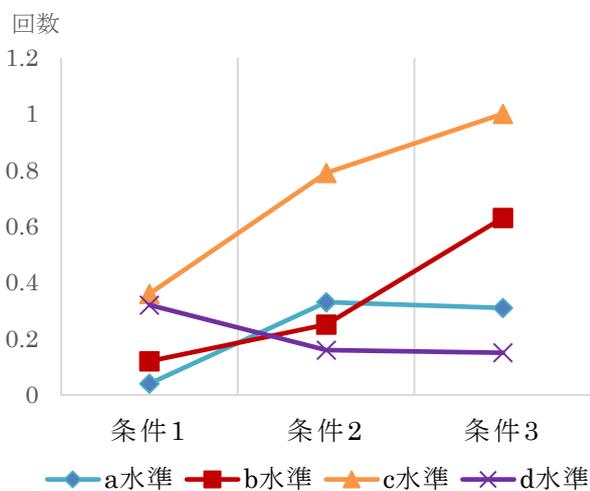


図2 コミュニケーション成立水準の回数の推移

また、各条件のコミュニケーション成立水準別回数を100%で換算した結果、条件1から条件3にかけてb水準の占める割合が増加(14%から30%)を示した。一方、条件1では38%の割合を示したd水準は条件3では8%となり減少を示した(図3)。

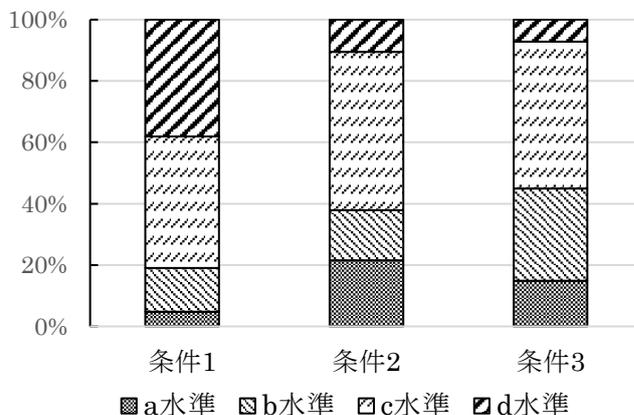


図3 コミュニケーション成立水準の条件別割合

2 言語、非言語コミュニケーション機能

条件1から2にかけて両幼児の「報告」「意思表示」「オノマトペ」「決まり文句」の発話や「人注視」「受け渡し」「物接触」「物操作」の動作が増加傾向を示した。条件2においては「崖」「新幹線」等の絵本に関する発話が見られた。条件2から条件3にかけては「質問」「指示・命令」「意思表示」「受容」の発話や「人注視」の動作が増加傾向を示した。条件3においては「でんしゃのおうちつくりたいな」「かたたたん」等の絵本に関する発話が見られた。一方、「教示」「賞賛」「批判」「否定」「代弁」の発話や「人接触」「人操作」「手指動作」「応答」「身振り」「物注視」の動作の大きな変化は3条件を通して見られなかった。

対象幼児から研究者へのコミュニケーションや研究者の幼児間の仲介は、A男児においては条件2から3にかけて減少傾向を示した。また、B女児においては3条件を通して減少傾向を示した。

3 遊びの変化

条件2においては条件1では見られなかった両幼児が一緒にルールをつなぎ合わせる姿が見られ、他児が使用のおもちゃに似たおもちゃを用いて一人で遊ぶ平行遊びから、他児と共に遊ぶ連合遊

びへと変化した。また、条件3ではより多くのレールや積み木を使用し共に絵本に登場する事物を作成する姿が見られた。

V 考察

対象幼児への絵本の読み聞かせ(条件2)によって、コミュニケーションが成立したa水準、成立しかけのb水準の回数が増加した。一方で、コミュニケーションが成立しないc水準の回数も増加の傾向を示した。いずれにしても、幼児から幼児への発話の回数が増加したと言える。また、コミュニケーションの機能別においては「報告」「意思表示」「オノマトペ」「決まり文句」等の発話や、「人注視」「受け渡し」「物接触」「物操作」等の動作が増加の傾向を示した。対象幼児が遊びの中で絵本の絵を見ることのできる環境下での遊び(条件3)においては、コミュニケーションが成立しかけのb水準と、成立しないc水準の回数が増加した。また、機能別においては「質問」「指示・命令」「意思表示」「受容」等の発話や、「人注視」の動作が増加の傾向を示した。

対象幼児の発話内容、表出回数の変化、遊びの変化から、絵本の読み聞かせによる物語の共有は絵本の内容を遊びの中に取り入れようとする姿勢を促し、一人遊びである平行遊びから幼児同士の遊びである連合遊びへと変化させ、相手への応答を要求しない発話を増加させると同時に、コミュニケーションの成立、成立しかけ、成立しない回数に増加の影響を及ぼすことが明らかになった。絵本の読み聞かせで使用した絵本の絵の掲示は、遊びの中で絵本の絵が見られることによりコミュニケーションが成立しかけ、成立しない回数が増加し、応答を要求しない発話が応答を要求する発話に移行し、幼児がよりコミュニケーションをとる姿勢を示すようになった。また、自分の作りたいものが明確になり、絵本の絵や物語内容を共有している他児と共に絵本に登場する事物を作製しようとするによって「指示・命令」「意思表示」

が増えたと考えられた。

VI 今後の課題

今後の課題として以下の項目が挙げられた。

1. 絵本の読み聞かせによってコミュニケーションが成立しない回数の増加は止められず、コミュニケーションが成立するまでには至らなかった。そのため、聴覚障害ゆえの聞こえの困難からくる音声言語の伝わりにくさに何かしらの働きかけをしなければならぬことが挙げられた。
2. 事例数が少ないため、上記の効果が一般化できるかどうかは疑問である。今後は事例数を増やして検証する必要がある。
3. 同じ遊びを繰り返しているため、遊びへの慣れや練習効果が結果に影響を及ぼしている可能性がある。今後は他の遊び場面での研究も必要である。

文献

- 我妻敏博(1999)聾学校の早期教育における言語指導を考える。聴覚障害, 54(4), 4-10.
- 福岡県立福岡聾学校(1999)楽しくやりとりできる「ごっこあそび」の援助を通して。聴覚障害 vol. 54(4), 14-23.
- 栢田弘子(2003)幼児の言葉の指導は豊かなコミュニケーションから。聴覚障害 vol. 58(7), 4-10.
- 三浦哲・渡辺淑子・渡辺香(1986)聴覚障害幼児の母子コミュニケーションに関する研究(Ⅰ)ーコミュニケーションの成立に関与する要因についてー。聴覚言語障害, 15, 155-158.
- 文部科学省(2009)特別支援学校幼稚部教育要領(平成21年3月)
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/tokushi/1284518.htm> (2016年12月24日)
- 大塚明敏(2002)聴覚障害幼児に対する遊びの指導について。長野大学紀要 24(1), 9-30.
- Parten, M. and Newhall, S. M. (1943) *Social behavior of preschool children*. In R. G. Barker, J. S. Kounin & H. F. Erite (Eds) *Child behavior and development*. New York. McGraw-Hill, 509-523.
- 佐藤公治・西山希(2007)絵本の集団読み聞かせにおける楽しさの共有過程の微視発生的分析, 北海道大学大学院教育学研究紀要 100, 9-49.
- 杉山砂寿(2015)幼稚園3歳児における子ども同士のかかわり合い:劇遊びを通して, 筑波大学附属聴覚特別支援学校報告. 第49回全日本聾教育研究大会佐賀大会.
- 館山千絵・鄭仁豪・松本末男(2008)聴覚障害幼児における母子相互作用の発達的特徴に関する研究ーコミュニケーションと遊びの分析を通してー。障害科学研究, 32, 11-19.
- 塚原和俊(2006)聾学校における教師と児童生徒のコミュニケーションに関する研究。上越教育大学大学院修士論文。